

心から愛する妻を、

極太他人棒で貫いていただきました



心から愛する妻を 極太 他人棒で貰って いただきました

第1章 俺の秘密の性癖

部屋でひとり机に座る。机の上にはノートパソコンが置かれていて、そのまわりには雑誌に本や仕事の資料が積まれている。それは、半分はカモフラージュのためだった。本当は家に仕事を持ち帰らなければならないことは、めったにない。俺はノートパソコンのディスプレイをそっと開いた。

マウスをクリックするとスタンバイモードが解除される。画面はただの青。デスクトップには「確認」とか「精算」とか、無機質な名前のアイコンが並んでいる。実際、怪しいファイルはこのパソコンのどこにも置かないようにしていた。俺は小動物の慎重さで、自分の秘密を隠していた。

ブラウザを立ち上げて、毎晩のように巡回しているサイトを開く。トップには“新着記事一件”と記されていた。

新しい投稿があつたみたいだ。

本文に移動すると「長文で失礼します。自分は28歳、これといって特徴のない、中肉中背の

フツメン。仕事もごく普通の会社員。まあ社畜ですね」という自己紹介が目飛び込んでくる。俺自身と似たようなプロフィールだ。期待できるかもしれない。早くも胸が高鳴った。だがその時、ドアの外から声をかけられて、高鳴った胸がそのまま破裂しそうになった。

「僕ちん。もう寝ますよう」

妻の愛衣だ。俺はあわててパソコンを閉じ、平静をよそおった。

「先に寝てて。俺ももうすぐ行くから」

「こんな遅い時間なのに、なにやってるの？」

ドアが開き、そこから妻が顔を半分だけのぞかせた。子どもがよくやるような仕草だ。くりっとしたあかるい目が笑っている。人妻になっても愛衣は、ふたりきりの時にはそんな少女のような仕草を見せる。もつとも童顔の妻にはそれがよく似合っていた。

「ごめんね。明日の会議の準備があつて」

「ふーん。そうですかあ。僕ちん、まだお子ちゃまなのに、お仕事やってるフリでちゅかあ」

これも妻がよくやる悪ふざけで、俺のことをわざと小さな子ども扱いしているのだ。結

婚して4年になるが、俺たちにまだ子どもはいなかった。だから妻もこんな悪戯をするのかもしれないが、そんな時、いつも俺は顔をしかめて「やめなよ。俺だってもう大人なんだから」と言い返していた。

でも内心では、妻に子ども扱いされるのも気に入ってたりする。彼女も、とつくにそんな俺の気持ちを見抜いているのかもしれない。

「なにかエッチなものなんか、見てたりしないよね」

妻がドアを大きく開けて部屋に入ってきた。もう寝る用意をしてパジャマに着替えている。知り合ったころは、まだほっそりとして少女の面影を色濃く残していた妻だが、今では乳房も人妻の重みを増し、腰のあたりも魅惑の量感を見せるようになった。

ただ肌だけは変わらずに、今も抜けるように白い。むしろ今のほうがしっとりとして、きれいになった気がする。

ブラジャーをしていない胸が高く盛り上がっているのが目に入った。俺は知っている。その下で揺れる乳房が、ずっしりと重くて、さわると手に吸いついてくるほど柔らかいのを。

その先に実る乳首の感度がよくて、手のひらで下乳をつつみ指先を這わせると、すぐにかわいい声をあげるようになる。それも知っている。夫の俺だけが知っている。

「み、見てないよ。そんなの。エロサイトなんか」

「どうかなあ」

愛衣は後ろから俺のことを抱きしめてまた立ち上がった。そして「僕ちゃんも早く寝るんですよ」といつて去っていった。妻の残り香がただよう。俺は少し名残惜しい気持ちで後ろ姿を見送った。揺れる尻が「早くベッドにおいで」と誘惑しているように見えた。

四つんばいにさせて脚を開かせる。背中を落として尻を突き出すように命令すると、真面目な彼女は恥ずかしがって「いやいや」と小さく首をふる。だが軽く叩いてやると、妻は辛そうな顔して、おずおずと尻をかかげる。ふだんはお母さんぶっているくせに、夜になると案外そんな風にMつけが強いのも、妻のかわいいところだった。

廊下の先で寝室のドアが閉まる音がひかえめに響いた。「仕事をしている」という俺のこゝとを気づかって、余計な音をたてないようにしているのだろう。そういう気づかいが自然にできるのが妻だった。

俺はしばらく耳をすませて、安心できる時間が経つまで待った。さっき妻に「エッチなものなんか見てないよね」といわれた時には本当に焦った。凶星だったからだ。俺は呼吸を整えてパソコンを開き、さっきの続きを読み始めた。

最初に言っておくけど、長文になるからごめんなさい。妻のスペックはひとつ年上の29歳。身長は152cmと小さい。でも胸はCカップある。自分にはよくわからないけど会社の後輩には、アイドルみたいで、しかもおっぱいが大きいというらやましがられたりします。

そんなロリ巨乳の奥さんを……。俺より年下なのになんて大胆なヤツだろうと感心した。俺が読んでいるのは、素人の体験告白投稿サイト。その中でもここは「自分の妻を他人に抱かせたい」という、ちよつと特別な趣味の持ち主が集まる『妻と他人棒』というページだった。

私も、ほかの男の巨根が妻に挿入されているところを見たくてしかたがありませんでした。

今日の投稿者もまた、そんな変態だった。彼は大学時代の友人と相談して、ついに他人棒体験を実行してしまったのだそうだ。

妻の自慢の乳房で（妻が自分の乳房を自慢しているという訳ではなく、私が自慢に思っているだけです）、他人棒をはさんでいる姿を想像してはいつもこっそりオナニーをしていました。

妻は乳首が特に弱いんです。ピンクでぶつくりとふくらみ気味。そんな妻の乳首が他人棒にこすられて、気持ちよくなっているところを見たいと思っていました。

友人の名前は、ここでは仮に「ヒロ」としておきますね。彼は大学でも体育会にいて、小柄だけがっしりした筋肉質の男です。そしてここがポイントの高いところだったのですが、みんなで旅行に行った時とかにネタにされるほど、大きな“ブツ”の持ち主でした。

妻には前から「大学時代の友人を連れてくるから」と言っておりました。その日、缶ビールのパツクをおみやげにもって訪れたヒロを、妻はなんにも知らずに「いらっしやい」と言って愛想よく迎えています。私はそんな妻を見て少しだけ心が痛みましたが、でも興奮には勝てませんでした。

俺も興奮には勝てず、ページをスクロールした。

妻の手料理を食べた後、私たちはとにかく妻にビールを飲ませて酔わせることに専念していました。妻はそれほど強くはありません。

私たちは小さなテーブルを囲んで、床の上にそのまま座っていました。ヒロはノリの軽いヤツなので、「おまえの奥さん、ほんとかわいいな」みたいに、調子のいいことを言っています。

最初は、はじめて会う夫の友人の前で緊張していたみたいだった妻も、酒が進むと私にもたれ

て甘えた様子も見せるようになりました。

妻のブラウスのすきまから、白いブラジャーがちらちらと見えます。ヒ口もそれをこっそりのぞきこんでいるのが、私にはわかりました。

10時を回り「もういいだろ」と思った私は、ヒ口の目を見て合図をし、そして妻の肩を抱くと、濃厚なキスをしました。

十分に酔っ払っていた妻は、ヒ口がいるのも忘れてねっとりとしたキスを返してきます。片目でヒ口の顔を見ると、先ほどまでにぎやかだったヒ口が息を飲んで固まっていました。実は私も喉がカラカラになるほど緊張していました。

やめるのなら今だ。まだ引き返すことができる。でも自分の頭の中なかにははじけ飛んで、私は、ヒ口が見ている前で妻の乳房をさぐりはじめました。

妻はさすがにハツとした様子で「ちよつとダメ。ヒ口さんいるよ」といって、体を離そうとするのですが、私は「いいじゃん別に」といって、妻を抱きしめます。そうするうちにヒ口が妻のそばに寄ってきました。

「おお、ヒ口もいっしょにやるか？」

「ちよつと。なにいつてんの。ダメ。ダメだつてば」

妻は必死になって抵抗しましたが、私には妻も興奮しているのがわかりました。ヒ口が妙に真

面目な顔をして、妻の背中から手を回します。そして両手で乳房をもみはじめました。私は体を離して、妻のふとももをまさぐります。

乳房はヒロ。そして私の手はふとももに。ふたりの男に責められる妻。妻が喘ぎ声をあげました。

「あつ、ダメっ、ほんとダメだから……」

私が下着をかわして指を妻の体の奥に届かせると、そこはすでに熱く、ぐっしりと濡れていました。妻がこんなに濡れているのは珍しかった。

「ああ、やめて……」

私が妻の体の中で指を動かすと、ひときわ高い声をあげて私に抱きついてきます。しかしそれでもヒロは、妻の乳房から手を離さそうとせず、それどころかブラウスの裾から手を入れて直接、揉みしだきはじめました。

「あつ……」

ヒロが妻を抱き寄せます。妻は目を閉じて、背中をヒロにあずけていました。私は妻のブラウスのボタンをはずしました。

「ダメっ」

しかしその口調は弱く、ヒロも私もやめません。こんなプレイは初めてだというのに、ヒロが

見事な連携を見せて、後ろからブラウスを脱がせる。そしてすかさずブラジャーをはずします。妻の体が反り返り、ふたつの乳房がぷるんと弾けました。妻の体が、他の男の目に晒されている。私は頭が沸騰しそうになるほど興奮していました。

「んんっ」

ヒロは妻の背中から、乳房の柔らかさを確かめるように揉みしだきます。ヒロの指が乳首にかかる、妻がいつそう激しく体を反らせました。

「あっ、ほんとダメだから」

妻が大きいけぞり、白い喉があらわになります。私は呆然としてそれを見ていました。ちょっとヤバイくらいに勃起していましたね。

ヒロは後ろから妻の顔をのぞきこんで、反応を確かめていました。妻のぷっくりとした乳首を



強くつまんだかと思うと、優しく指でなでる。不意をついてちよつと引つ張ったりする。ヒ口の愛技に、妻は乳首だけとは思えないくらい感じていました。

「いいの？　こんなこと、いいの……？」

妻が目を閉じたまま、うめきます。それは私への言葉でした。ヒ口が妻の耳元で「いいから、いいから。今日だけだから」とささやいていました。

「ああっ」

酔いと、そして夫の前でほかの男に体を任せているという異常なシチュエーションのためでしょうか。妻は、意識が朦朧としているみたいでした。

妻は甘い声をあげて、両腕をあげてヒ口の頭をつかみました。青さの残る妻の脇の下があらわになり、私の目はそこに釘付けになりました。そこでさらなる衝撃が私を襲いました。

妻は自分からヒ口を引き寄せると、顔を背後に向けて、キスをせがむ様子を見せたのです。ヒ口は妻の肩越しの唇を受け入れ、ふたりはねつとりと舌をからませていました。妻が、体だけではなく、心までほかの男に開いてしまったのが、はつきりとわかりました。私はその瞬間に、なにもしていないのに大量に射精してしまいました。

その後、「私氏」は何度もオナニーを繰り返しながら、ヒ口君が自慢の肉棒で妻をつらぬ

くの見守っていたそうさ。そしてヒロ君を帰したあと、獣のように妻の体を求めたという。続けざまにふたりの男に抱かれた奥さんは、もの凄いい声をあげて何度も達したそうさ。

これが私の、はじめての他人棒体験でした。妻ですか？ あの後には、なんというか今までよりいつそう、愛情が深くなった気がします。みなさんもこんな気分なのでしょうか？ ちょっと刺激が強すぎて、今でも思い出すと頭がくらくらします。

投稿はそう締めくくられていた。最新の投稿だというのに、すでにいくつかのコメントがつけられている。

俺は念入りにブラウザの履歴を消してから、パソコンの電源を落とした。部屋の電気も消す。股間がすっかり硬くなっていて、それで歩きにくかったが、足音を忍ばせて寝室に向かった。こんなサイトを見ていたことはバレていないはずだが、やっぱり後ろめたかった。

ドアを開けると、愛衣がベッドの中にいる。寝室は妻の趣味で茶色の木の家具に統一されていて、落ち着く部屋だった。そつとベッドに潜り込む俺に、妻が背中を向けたまま「僕ちんもやつとおネムですかあ」とささやいた。

「うん。僕ちゃんもおネムなの」

俺はわざと甘えた声を出して、妻にむしゃぶりついた。妻も向きなおって俺を抱きしめてくれる。俺は妻の胸に顔をうずめた。妻の暖かい体につつまれる。ミルクのような匂いが俺を満たした。こんな時、俺は頭の中がしびれて、もうなにも考えることができなくなる。「妻と出会ってよかった」と心の底から感じるのは、こんな風に妻に甘えている瞬間だった。